セリーヌ『城から城』における「サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島総督」をめぐる考察

早　川　文　敏

序

セリーヌは1930年代に *Bagatelles pour un massacre* などの政治文書で反ユダヤ主義的発言を繰りかえし，ドイツとの協力政策を主張したため，第二次世界大戦末期には戦争犯罪人として手配され，逃亡生活を余儀なくされた。その中でセリーヌは一時期，ヴィシー政府の要人およびその他の対独協力者が集められていた町シグマリンゲンに滞在する。その時の経験を元に書かれた小説が『城から城』だ。セリーヌは，彼らと政治的主張を同じくする部分が多かったためだろうが，小説中に登場する政府要人を時として非常に好意的に描いている。

しかし第二次世界大戦の歴史を見ると，もちろんヴィシーの要人たちは，ド・ゴールやレジスタンスといった勝者の側に対立し，敗れ去った敗者の側に属する。そしてヴィシー政府がフランスを支配し，ドイツに協力した4年間は，フランスの歴史から消されるべき期間だったとして，フランス人全体の心に深い傷跡を残すことになる。戦後は対独協力者粛清の動きが非常に激しく，ヴィシー政府の首相ラヴァルなどの政治家，ブラジヤックなどの知識人を問わず多くが処刑されたが，このように後世から厳しい評価を受け，忌み嫌われている対独協力者およびヴィシー政府の関係者との接触を多く描いた小説であるだけに，『城から城』は本来，歴史的な予備知識を持ち，対独協力者という敗者の側からの視線，敗者の感情を考慮しなければ，理解が難しい小説だと思われる。ことに「(レジスタンスの) 神話化の程度は，ある意味では本国フランスにおいてよりもむしろ日本において，極端だったという印象[1)]」もあり，対独協力者の存在はその陰に隠れる形となって，詳しい情報が十分一般に伝えられてきたとは言いにくい。よってヴィシー政府や対独協力者の存在に注目しつつ歴史的事実を整理すれば，この小説に正しい文脈を与えることができ，より理解を深めることができるだろうと考える。そのような理由から『城から城』を選んだ。

本稿では『城から城』の中のごく短い一節について考察を加えるが，一見目立たないこの箇所の歴史的背景を明らかにすることで，作者の主張を改めて見直すことができるだろう。それは「サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島総督」に関する部分である。

1　「サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島総督」

『城から城』の後半に，セリーヌが当時のヴィシー政府首相ピエール・ラヴァルと会談する場面がある。ここでセリーヌは話の成り行きから，ラヴァルおよび同席していた産業大臣ビシュロンヌに青酸カリの入った小瓶を提供することになる。これは自分がいつも上着のポケットに隠し持ってるものだという。肌身離さず持っているということは，もちろん連合軍またはレジスタンス勢力に捕まったときのことを想定してのことだろう。ラヴァルとビシュロンヌもまたこの毒薬に非常に興味を示すが，それも無理はない。彼らが『城から城』の舞台であるシグマリンゲンに滞在したのはもう戦局もほぼ決定した大戦末期，1944年11月以降のことであり，いつドイツが崩壊して，彼ら自身が連合軍と対峙することになるかわからない時期だったからだ。シグマリンゲンに滞在したヴィシー政府要人およびその他の対独協力者たち全員にとって，拷問をうける前に楽に自殺できるこのような方法が喉から手がでるほどほしいものだったということは想像に難くないし，実際この小説の別の箇所でもセリーヌはその点に触れている[2)]。青酸カリをセリーヌから手に入れたラヴァルとビシュロンヌは次のように満足した様子を見せる

> 私は青酸カリを机に置いて彼らに見せた……ラヴァルの机に……私の小瓶を……[……]二人とも迷っちゃいない！……もうどっちがもらうかって！……[……]
>
> 「くれるんですね？くれるんですね？」二人とも私に聞く……もうまじめな顔だ！
>
> 「お二人で分けて下さい！」
>
> うまくやってくれ！……でも考え直す……
>
> 「いや，ケンカしないで！……お二人に一つずつさしあげましょう！一旦開けたら！いいですか？湿気ちゃいますよ！だめになっちゃいますよ！」
>
> 「でもいつです？……でもいつ？」
>
> ああ，二人とも真面目に受け取ってる！やっぱり！別のポケットからもう一瓶出した。もう一個の隠しポケットから！[……]よし，二人とも私をしげしげと見てる……もう黙ってる……でも満足なんだ……[3)]

ここで自分のために取っておいた虎の子の青酸カリを渡してしまったセリーヌは，その代価としてラヴァルに突然奇妙な願いを申し出る。自分をサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の総督に任命してほしいと言うのだ。

> …分かった！……約束しましょう！でもあなたは？……何かしてほしいことくらいあるでしょう？」
>
> そこで一つ考えが浮かんだ！もちろん私はそれまで何もかも断っていた！何もかも！……だが場合が場合だ……もう何を言っても意味はない……
>
> 「じゃ，総理，ひとつ私をサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の総督にしていただけないもんでし

ょうかね？」

遠慮することはない！

「約束しよう！……認めます！決まった！書いといてくれるね，ビシュロンヌ？

…もちろんですとも総理！」

ラヴァルはでも……ラヴァルは知りたがった……

「それにしても先生，一体何だってそんなこと考えついたんです？

…別に深いわけはありませんよ総理！サン＝ピエール＝エ＝ミクロンの美しさですよ！……」[4)]

カナダのセントローレンス河口にあるサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島は当時フランスの植民地だったが，1944年時のヴィシー政府にはもちろん海外の植民地を統括する力はなかった。セリーヌ自身「もう何を言っても何の意味もない」と言っているように，たとえ時の首相ラヴァルが保証したとしても，一植民地の総督への任命は何の効力も持たない約束でしかなかった。無意味だからこそセリーヌはこの妙に壮大な願い事を伝えたとも言えるのだが，それにしてもこの形だけの総督任命は唐突で，奇妙な印象を与える。セリーヌはなぜここで突然植民地の総督にしてほしいと願い出たのだろう。

2　セリーヌとサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島

読者の誰もが抱くはずのこの唐突な印象を打ち消すために，セリーヌは「サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の美しさ」という理由をあげている。そして続ける。

話してやった……又聞きで言ってるんじゃない……行ったことがあるんだ！あの頃ボルドーからサン＝ピエール島には25日かかった……吹けば飛ぶような「セルティック号」で……[5)]

実際，セリーヌはサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島を訪れたことがあり，この渡航の詳細はすでに明らかにされている[6)]。セリーヌは1938年4月15日にボルドーを出航し，アメリカ大陸に向かった。彼はこのとき43才，すでに『なしくずしの死』を書き終えて小説の出版はしばらく途絶えていたころであり，むしろ政治パンフレットの執筆期と言ってよいころだった。『皆殺しのためのバガテル』の出版と『死体派』の出版の間だ。アメリカで『なしくずしの死』の翻訳が出版されるため，その販売促進をするというのが旅行の直接の目的だった。サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島はカナダのニュー・ファウンド・ランドのすぐ脇に位置するため，アメリカ合衆国を訪れる際に立ち寄るのは地理的に容易だったのだろう。彼が乗った船は小説中「セルティック(*Celtique*)」とされているが，実際は「セルト（Le Celte)」という名の貨物船だ。小さな船で，船長はジャン＝マリ・エノー，乗客はセリーヌを含めて4人のみだった。セルト号は4月26日にサン＝ピエール島に到着する。数日の滞在の後，彼はカナダに寄り，モントリオール生まれの文

筆家ヴィクトル・バルボーとともにある右翼政治集会に出席，その後ようやく目的地の合衆国に着くことになる。

ところでセリーヌは何のためにこの島に立ち寄ったのだろうか？ジボーは「おそらくたまたま見つけた休息地で，気分転換のため[7]」と言い，ヴィトゥーは想像力を働かせて「将来身を寄せることになるかも知れない逃避の地を探すため[8]」と言っている。ヴィトゥーの言い方は大げさなようにも見えるが，根拠が無いわけでもない。1938年といえばドイツがオーストリアを併合，さらにチェコスロバキアのズデーデン地方を要求した年だ。あわや戦争かという世界の動きの中，ミュンヘン会議によって戦争そのものは回避されたが，それは実際には英仏がドイツの領土拡大を容認し，拡張されたドイツとの戦争を将来に先延ばしするだけの形となった。実際アンリ・マエは「この年，ヨーロッパには世紀末の悪臭のようなものが漂っていた[9]」と証言し，ルネ・エロン・ド・ヴィルフォスは，セリーヌが，ヨーロッパはとんでもないことになるだろうからどこかへすぐに逃げなくてはいけないと言いつつ「あと一世紀保つ国は一つしかない，司祭が治める国，世界中でもっとも退屈な国，カナダ……そこに行こう，そしてミサを捧げよう[10]」と語っているのを伝えている。

しかし，実際にはサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島とはどういう場所なのだろうか？ジボーはセリーヌが「誰にも求められることがなく，将来の戦争で奪い合いになることなど決してない，何もない島[11]」を探していたと伝えているが，本当にそのように世界情勢から切り離された場所なのだろうか？たとえもし1938年の旅行の際に立ち寄った理由がそうであったとしても，1944年と推定される年，ラヴァルにその島の総督に任命してくれるよう頼んだときも本当にまだそこを平和な逃避の地と考えていたのだろうか？

3　サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の美しさ

まずサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の地理的な特徴を見ておくべきだろう。

先ほども見たように，セリーヌは小説の中で「サン＝ピエール＝エ＝ミクロンの美しさ」という表現を使っている。そしてそれは「大西洋のただ中[12]」にあると言う。この記述を見るだけなら，小説を読んでいる間，どうしてセリーヌがサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島を欲したのか読者が疑問に思うことはないと思われる。

しかし実際には，サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島はタヒチやレユニオンのような保養に最適な植民地などでは決してない。サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島はミクロン島，サン＝ピエール島，ラングラード島とその他の小さな島々からなり，北緯46度50分，西経56度20分に位置する。この緯度は北海道の北端宗谷岬よりも高い。ニュー・ファウンド・ランドに張り付くように存在しているので，地図を見るだけならカナダ領にしか見えないだろう。総面積は242平方キロと小さく，これはワシントンDCの1.5倍にあたる。人口はおよそ6000人で，産業は漁業のみ。地質は岩と泥炭が多く，気候は寒冷（2月の平均気温はマイナス3度，8月でも16度）。キャプ

テン・クックはニュー・ファウンド・ランドを称して「季節は3つのみ。7月，8月，そして冬だ」と語ったと言われるが，数十キロしか離れていないサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島も同じもののはずだ。湿度が高いためよく霧が発生し，風が強い[13]。セリーヌのケルト趣味を考慮するなら確かに「美しい」自然なのかもしれない。どうも彼が愛着を抱くブルターニュによく似ている場所のようだからだ。しかし少なくとも「大西洋のただ中」は全く見当違いな説明であるのは確かだ。

4　呵責の島

ところで，この島の総督にしてくれるようラヴァルに頼むというエピソード自体は，セリーヌの実体験から出ていることがわかっている。彼は弁護士のアルベール・ノーに当てた1947年の手紙で次のように書いている。

> 一緒にふざけながら，私は彼（ラヴァル）に，もしもう一度権力の座に返り咲くことになったら，サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の総督にしてくれと頼んだものだ　— 現世での私の唯一の願いだ。ラヴァルはいつも検討すると約束してくれたよ！……私はサン＝ピエール＝エ＝ミクロンが大好きだ —　世界一貧しく，世界一荒涼とした島　— 我々に残された唯一のカナダ領，残された唯一の偉大さ —　「呵責の島」だ[14]。

セリーヌは実際にラヴァルに会って，一度ならずこうした要求を繰り返していたようだ。サン＝ピエール＝エ＝ミクロンに対するセリーヌ自身の愛着ははっきりしている。しかし「世界一貧しく，世界一荒涼とした島」という部分を見る限り，彼自身決してこの島を引退後の生活にふさわしい保養地のように思っていたわけではないことがわかる。確かに逆説的な愛情業現ではあるのだろうが，少なくともこれでは小説中の表現とズレがあると言わざるを得ない。

ただ少なくとも，なぜサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島総督になりたがったのかというもう一つの理由がこれでわかる。そこは行ったことがある島だから選ばれただけではなく，「我々に残された唯一のカナダ領，残された唯一の偉大さ　— 『呵責の島』」だから選ばれたのだ。フランスはかつてカナダにより広い領土を持っていたのに，現在はこの非常に小さな島々を除いて北米には領土がない。領土を失った苦しさを象徴的に表しているのがこのサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島だということだろう。かつてのフランスの偉大さを思い出させる罪深い島々。そうした島々を所有したいと願うのにはセリーヌの皮肉のセンスが感じられる。そしてそれは単なる皮肉ではなく，その感情の底に愛国心が流れているのも確かだ。それゆえこれは愛国心が生んだ屈折した表現と言ってもいいだろう。

しかしセリーヌが現実世界でラヴァルにこのような頼み事をした理由を，このまま小説内のエピソードにもあてはめていいのだろうか。小説にはより内在的な理由があるのではないか。

もう少し小説と現実におけるこのエピソードの違いをはっきりさせたい。まず何より，現実ではふざけあって何度も繰り返した冗談とされているのに，小説ではこれは冗談として扱われていない。現実ではラヴァルは承諾はしていないのに，小説では承諾している。現実ではラヴァルが再び権力の座に返り咲くことになったら，という条件なのに，小説ではこの条件はない。小説の中でもラヴァルは実質的にもう政治的権力を完全に失っているというのに，それにもかかわらず彼はセリーヌを総督にすることに承諾しているのだ。そもそもこの冗談は落ちぶれた首相ラヴァル[15]をからかうために言ったものだったはずだ。小説中でもたしかにいくらかの滑稽味を出してはいるが，ラヴァルが真面目に答えている等の違いがあるため，微妙にエピソードの持つニュアンスが違うように思われる。セリーヌも他の箇所で自分が総督であると繰り返し言っていることからもわかるように，単なる冗談ではなく，彼自身かなりこのことにこだわっているように見られる。やはり現実と小説のエピソードを単純に重ねて見るわけにはいかないだろう。

セリーヌはなぜサン＝ピエール＝エ＝ミクロンにこだわったのか。そしてなぜ「美しさ」「大西洋のただ中」といった当たり障りのない言葉でその理由を隠し，小説内で明らかにしないのか。このエピソードの意味を正しく知るには，どうしても，サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の歴史についてよく知っておく必要がある。

5　島の歴史

先の引用箇所でジボーは，サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島を「誰にも求められることがなく，将来の戦争で奪い合いになることなど決してない，何もない島」と表現していたが，実はこれに関してジボーの認識にはかなり問題があると言わざるを得ない。

サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島は16世紀の初め頃からフランス人の漁民が訪れていた。1536年にはすでにジャック・カルチエという人物が訪れた記録がある。居住が始まったのは17世紀に入ってからだった。1670年にはフランスの漁業基地が作られていたというが，1713年のユトレヒト条約でフランスはイギリスに島々を譲渡している。フランスの漁民はそれでも島に居続けたが，やがてイギリス人の人口が増え，フランス人は排斥されるようになる。1773年にはイギリス艦隊が島を占拠している。1783年にフランスはカナダの一部をイギリスに割譲するという条件で島を取り返すが，1793年には再びイギリス人が移民を強行。翌年フランスのリシュリ提督が町に放火してイギリス人を追い出している。1803年にはもう一度イギリス移民が行われる。1814年のパリ条約で最終的にフランスの領土であることが取り決められるが，1858年にもまたイギリスと漁業権を巡って紛争が起きている。もともとこの海域は非常に良好なタラの漁場で，しかもヨーロッパからアメリカへ行く際の中継地点として良い位置にあったため，商業的に重要な役割を果たしてもいた。そのため，イギリスとフランスの２国による領土争いは島の歴史の始まりからこのように幾度も繰り返されてきた。サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島は両国にとって長い間確執の舞台そのものだったのである[16]。

しかしそれだけではない。第二次世界大戦中，この島で国際間の緊張を一気に高める事件が起こった。いわゆるサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島事件である。

6　第二次世界大戦における植民地をめぐる対立
― イギリスとフランス（ヴィシー政府）―

サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島事件はヴィシー政府，ド・ゴール派，イギリス，アメリカといった第二次世界大戦に参加した各組織，国家の利害が複雑に絡み合って起こった事件であるため，事件に至るまでの当事者間の関係を整理しておく必要がある。レイノー内閣の解散後，国家元首に任命されたペタンは1940年6月22日ドイツと休戦協定を結ぶ。パリを占拠され陸軍戦力の大半を失ったフランスの，ドイツに対する実質的な敗戦宣言だ。このときすでにフランスはヨーロッパ戦線でドイツに反攻する力を失っていただが，実は非常に重要な駆け引きの道具をまだ持っていた。それが植民地と，海軍に残された艦隊である。

戦後しばらくは，歴史家の間ではヴィシー政府はフランスの国土を守るのに役立ったと考えられ，それなりに肯定的な見方をされることが多かった[17]。フランスはドイツの被害者であり，政治的経済的な協力を強要されていたのだと言うわけだ。フランス同様軍隊を失ったベルギー，オランダなどの国は政府機関をイギリスへ移し，公的にドイツの敵対国でありつづけた。それに対し，フランス政府はボルドー，クレルモン＝フェラン，ヴィシーへと拠点を移しながらも国内に留まり続け，ドイツへの協力政策を打ち出した。しかしこの協力とは名ばかりで，国内資源をドイツに利用されないようにするため，そして被害を最小限に留めるためにとった策だったと見られてきたのだ。そのような見方に修正を迫ったのがアメリカの歴史家パクストンだった。1972年の著書 *Vichy France* で打ち出した，フランスは国益を守るためドイツに自発的・積極的に協力を申し出たのだという主張は歴史家の間にパクストン革命と言われるほどのインパクトを与えた。

対独協力によってフランスは結局何を守ろうとしたのか。パクストンによれば，それが植民地である。今日から見ると意外なことだが，アメリカが中立を保っていた1940年の時点では，イギリスの敗戦は必至と見られていた。ドイツはかつてアフリカ大陸に持っていた植民地を第一次世界大戦の敗戦によって全て失ったが，第二次世界大戦が終わったあと，すなわち英仏敗北後の世界では，ドイツは現在フランスその他の国のものとなっているかつての自国の植民地を取り戻そうとするだろう。だから植民地は戦後の国際政治のバランスに重要な役割を果たすというのだ。ヴィシー政府首脳の間では「大英帝国を犠牲にして植民地の領有を広める[18]」ことが検討された。ラヴァルとダルラン提督の思惑によれば，イギリス敗戦後の新秩序の世界で，つまりドイツの支配するヨーロッパで，フランスはアフリカなど植民地とのつながりによって価値ある国でありつづけようとしたし[19]，さらにヴィースバーデンでの休戦協定委員会のフランス代表ユンツィジェ将軍は，「フランス，ドイツ，イタリアのために」アフリカのみならずイラクの石油産出地帯，およびシリアから地中海に至るパイプラインをフランスが所有することを考えた。これは当時の

アングロ＝サクソン石油トラストに対する報復ともなりうるし，何よりこうすることで最終的な和平を結ぶ際フランスに有利な条件を引き出せると考えたからだった[20]。

もちろんイギリスにしてみれば，フランスの持つ植民地はドイツへの物資供給の面で大きな役割を果たすことに変わりない。そしてドイツに戦略的な優位を与えることにもなる。実際，1941年5月のヒトラーと仏提督ダルランとの会談では仏領シリアの空港使用権がドイツが認められている[21]。イギリスとしては戦局に影響を及ぼすようなこうした状況を放っておくわけにはいかない。こうした利害の対立があったからこそ，イギリスはフランスの植民地に対する侵攻作戦を幾度も行った。そしてそれを予期していたからこそ，ラヴァルもペタンもイギリスに対する正式な宣戦布告について早い時期から考慮していた。ラヴァルは1940年8月26日の閣議でイギリスに対する宣戦布告を提案している[22]，ペタンは同年9月22日，もしフランスがまだ軍事力を所有しており，休戦協定によって軍事行動が禁止されていなければ，イギリスに対する反攻作戦を起こすだろうと語っている[23]。植民地を脅かすのはイギリスだけではなかった。自由フランス軍を旗揚げしたド・ゴールは，当然全てのフランス植民地に戦争遂行の協力を要請した。当初その多くは失敗に終わったが，これは初期戦線での総司令にしてヴィシー派のヴェイガン将軍による妨害があったからだったとされている[24]。

もう一つの焦点となったのがフランスの所有する艦船だ。開戦当時，海軍力はドイツにとって大きなネックとなっていた。ヒトラーは何よりも陸軍の戦力を充実させることを考えていたため，英仏両国に比べて所有する艦船が極端に少なかった。39年の時点での潜水艦を除く戦闘用艦船の所有数はイギリスが290，フランスが161，ドイツは47[25]。そのため休戦後フランスの艦船を使用できるとしたら，ドイツにとっては大きなプラスとなり，その後の戦局に大きな変化を与えることは必至だった。

確かに，休戦協定を結ぶ際の条件として，ドイツにはフランスの艦船を使用する権利はないという条項が加えられていた[26]。しかし，ダンケルク撤収事件やメルゼルケビール襲撃など[27]によって互いに確執を深めていた英仏両国の関係は悪く，イギリスから見れば，かつての同盟国フランスはドイツにその戦力を渡しかねない危険な存在と思われただろう[28]。実際フランスのドイツに対する戦力の提供という点では，例えば剣持の研究[29]によって航空機生産での協力体制についてその一端が明らかになっている。ドイツの強制的な徴発だけが問題だったわけではないのだ。艦船も植民地同様ドイツとの交渉を有利に進めるための重要な要素だった。ベルナノスの言うように，フランスの海軍はすでに「休戦以来，窮余の政策のためのゆすりや取引の道具[30]」となっていた。

そうした意味において，フランス植民地サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島はヴィシー政府にとってもイギリスにとってもないがしろにできない土地だった。ヴィシーにとってみれば植民地を確保しておくことはドイツとの交渉の手段を保ち，戦後の国際社会での地位を向上させることにつながるし，イギリスにしてみれば大西洋上に敵の領土を作ることはどうしても避けたかったろう。また同諸島にも当然フランス海軍の艦船は停泊していた[31]。これはイギリスとアメリカの監視下に置かれて自由な行動がとれない状態にあったとはいえ，ドイツとの交渉に重要な役割を

果たす貴重な海軍力はヴィシーにとって同諸島の重要度を増したはずだし，またこれによってイギリスが脅威を抱いていたことにも間違いはない。実際，アメリカにおいて自由フランスの代表の一人として活動していたガロー＝ドンバルによれば，1941年初頭イギリス政府はサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の解放（つまりイギリスによる占領）を検討さえしたという。しかしそうすればマルチニック諸島に駐留するロベール提督のヴィシー派艦隊に反攻を受けるだろうと同氏に忠告を受け，諦めている[32]。

7　第二次世界大戦における植民地をめぐる対立 —アメリカと自由フランス（ド・ゴール派）—

サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の領有権をめぐるアメリカと自由フランスの関係についても知っておく必要がある。

まず1940年，41年のような大戦初期の時点では，ド・ゴールの影響力はまだまだ小さく，自由フランスという組織もあまり認知されていなかった。休戦協定の後の1940年6月，ド・ゴールは単身ロンドンに渡り，BBC放送を通じて，世界各地に散らばっているフランスの代表者に協力を呼びかけた。しかし彼の呼びかけに応えた者は多くなかった。まず何よりもドイツの最終的な勝利を信じる者が多かったこと，ド・ゴールの階級が将軍でしかなく，仏軍の代表としてふさわしいものでなかったことがその理由だろう。またダンケルクやメルゼルケビールの事件で生まれたイギリスに対する不信感から，イギリスと協力して闘おうとする意欲がフランス人一般になかったことも挙げられるだろう。イギリスにはフランスの兵士が多く駐留していたが，その多くはヴィシー政府による帰国の呼びかけに応じた。1940年7月の時点でイギリスには18000人の仏海軍兵士と500人の士官がいたが，そのうちド・ゴールとともにイギリスに残ったのは兵士200人と士官50人だけだった[33]。兵士達がヴィシーに背いて闘い続ければ「妻，子供，年金，退職金，昇進」を失うことになったからだとアムルーは分析している。また，愛国心から生まれる義務として戦いをやめるという考え方もあった。イギリスと一緒に闘い続けることは，フランスのためにならないと考えられたからだ[34]。

パクストンは，ド・ゴール派を構成したのは主に既に海外にいた軍人だけだったという。植民地でド・ゴールに賛同した軍の実力者としては，ジブチのルジャンティヨム将軍とインドシナのカトルー将軍の二人がいる[35]。これは確かに少数ではあったが，自由フランスが勢力を伸ばすにはこのように植民地の残留部隊に呼びかけを続けるしかなかった。8月にはチャド，カメルーン，コンゴの部隊が自由フランスに参加する。正式な国家ではない自由フランスにとっては，40，41年の時点ではとにかく植民地において勢力を広げ，認知度を上げることが急務だった。

こうした動きに対してイギリス政府は原則的に協力の姿勢を取った。自由フランスの指導者としてド・ゴールを公式に認めたのはイギリスが最初だった[36]。既に戦争に巻き込まれており，少しでも多くの戦力を得たいイギリスとしては，信頼できないヴィシー政府に対抗する勢力を利用

しない理由はない[37]。

それに対して，後に同盟国となるアメリカの態度は違った。伝統的にモンロー主義をとり続けていたルーズヴェルトはヨーロッパ諸国の起こした戦争にかかわりを持つ気はなかった[38]。また，1940年7月にハバナ会議を開いたことからもわかるように，アメリカ大陸諸国，諸地域の政治的安定と支援を得，大陸をブロック化することに専心していた。政治的中立を保ち，そして少なくともナチスに資源を渡さないようにするためにも，新大陸のいかなる地域においても政治的変動が起こることを嫌っていたのだ。もちろんサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島，グワドループ，ギアナなどのフランス領に関しても同じで，アメリカはそれらがヴィシー政府の領土であると見なしていた。パクストンはヴィシー政府がアメリカから多くの物資供給を受けたことを明らかにしているが[39]，これもフランスが休戦協定を結んでからずっと長い間，アメリカがヴィシー政府を正統なフランスの政府であると認めていたことを示している。

そもそもルーズヴェルトと国務長官コーデル・ハルがド・ゴールおよび自由フランスに対して強固な反対の姿勢を貫いていたことを知っておかねばならない[40]。アメリカ人は占領されたフランスに対して深く同情の念を持っていたようだが，政府レベルでは当初何の権威も政治的正統性も持たなかった「いわゆる[41]」自由フランスおよびド・ゴールを認めることには警戒せざるを得なかった。アメリカ人一般もまた自国が戦争に巻き込まれることを当然嫌い，フランスがイギリスによって解放されることを望んでいたという。ルーズヴェルトおよびハルのド・ゴールに対する反感は根強く，後に戦局が好転し，終戦後のフランスでの政界再編を視野に入れ始めたころ，彼らはド・ゴールに対立する指導者としてジロー将軍を推し，後者を代表とするアメリカの傀儡政権を擁立しようと画策さえしていた[42]。最終的にアメリカがド・ゴールの自由フランス国家委員会（CNFL）を公認したのは1942年4月で，これはソ連，ベルギー，ポーランドなどが同委員会を認めたのに比べてかなり遅い時期となっている[43]。そのような経緯から，ド・ゴールがアメリカに対してサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島を含むフランスの植民地奪還の共同作戦を呼びかけたときも，アメリカからの返答は無かった[44]。

8　サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島事件

ここで同諸島をめぐる利害関係を簡単にまとめてみたい。サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島事件は各勢力のこのような思惑の中で起こった。

— サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の領有に関する伝統的な英仏の確執。
— ヴィシー政府の立場：植民地を守り，戦後体制での優位を得たい。しかしイギリスに抑え込まれている。
— イギリスの立場：敵としてヴィシーを抑えたい。フランスの艦隊をドイツに渡したくない。
— ド・ゴールの立場：勢力を拡大し，存在をアピールしたい。植民地しか支援してくれるとこ

ろがない。

— アメリカの立場：ヴィシー政府が正当な仏政権であり，ド・ゴールは信頼できない。戦後フランスに傀儡政権を作りたい。

形としてはヴィシーが領有している島を，誰が奪うのか。イギリスか，自由フランスか，アメリカ（および国益を同じくするカナダ[45]）か。それが問題だった。

サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島事件とは，1941年12月24日，元フランス海軍提督ミュズリエがド・ゴールの指示のもとサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島を武力制圧した事件だ。そうは言っても，上に見たような複雑な情勢において行われたこの計画は，紆余曲折を経てようやく実行に移されたものだった。自由フランス内で最初にサン＝ピエール＝エ＝ミクロン占領計画が検討されたのは1940年7月のことだ。サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島にはヴィシーの護衛艦が配備されていたため準備に時間がかかったが，10月にはド・ゴールはミュズリエに占領計画の実行を命ずる。しかし，これを知ったイギリス政府が政治的な理由でこの計画は実行されるべきでないと抗議，そのため延期となった。次に翌41年6月にもこの計画が持ち上がっているが，これも延期となる。最終的に実行されたのはようやく同年12月になってからだった。ド・ゴールもミュズリエも再三アメリカからの警告を受けており，そんな中行われたこの作戦はアメリカの虚を突くものだった[46]。またミュズリエが作戦に向かったときも外海での演習を装うことでハリファクスからの出港許可を得ている。彼はその後の突然の進路変更でサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島に向かったのだった[47]。

さらに，事件の直前，12月7日に起こった日本による真珠湾攻撃が同諸島をめぐる国際的緊張を一層高めていたことも知っておくべきだろう。この事件で，枢軸国に協力しているヴィシーに対するアメリカの不信感が一層高まっていた。実際ヴィシー側にとっても真珠湾攻撃は大きな意味を持つ事件であり，駐仏ドイツ大使アベーツによれば，ヴィシー政府がこれをきっかけとして，ドイツからの政治的譲歩を得ることを条件に連合軍に宣戦布告することを申し出たという[48]。アメリカとしてはこの攻撃で太平洋上の艦船を幾つか失ったのだから，大西洋のヴィシーの植民地監視に使っている艦船を太平洋に回したいと考える。そのためにはそうした地域を制圧し，アメリカ両大陸の大西洋沿岸（サン＝ピエール＝エ＝ミクロンやアンチーユなど）での安全を確保しておかなければならなかった[49]。そうした状況だったからこそ，カナダとアメリカがサン＝ピエール＝エ＝ミクロンの無線施設を武力制圧する計画がこの時期にあがったのだろう。またサン＝ピエール＝エ＝ミクロンの無線施設は沿岸の漁船のために気象情報を流していたが，これはドイツの潜水艦にとっても有益な情報であったため，連合軍として不都合だったという理由もあった。しかも無線施設の責任者はヴィシー派だった[50]。12月18日にはアメリカがカナダに制圧作戦実行を要請し，ド・ゴールはこれに抗議している[51]。誰が最初にサン＝ピエール＝エ＝ミクロンを手中に収めるのか。1940年12月はまさにそうした緊張が高まっていた時期だったわけだ。

そうした中，最終的に同諸島を手に入れたのが自由フランスだった。島のヴィシー派は一掃され，島の若者の多くは自由フランス兵として志願，ド・ゴールにとって貴重な戦力となった[52]。

大西洋上に港を持たなかった自由フランスにしては，サン＝ピエール島の港を使えるようになるのは戦略上都合の良いことでもあった。しかしそうした実質的なメリットよりも，ド・ゴールにとっては象徴的な意味合いがはるかに大きかった。サン＝ピエール＝エ＝ミクロン占領は何よりもド・ゴールの存在を連合軍諸国に主張する行動だった。これは後にいたっても変わらないことだが，自由フランスのような非正規の軍事組織にとって，存在をアピールできる機会は何よりも大切だったのだ。軍事力では圧倒的に英米に劣るのだから，何か強烈な印象を世界に与えなければ「フランス人の手によるフランスの解放」という事実を世界に納得させることができない。そうでなければ戦後処理においてフランスは大きな損失を被るだろう。例えば共産党系レジスタンスの指導者たちは，戦後のフランスで主導権を握るためにパリでの抵抗戦で実績をあげておこうとした。パリの破壊や荒廃もやむなしと考え，「パリは20万の死者に値する」と語った者もいたという[53]。また大戦末期，連合軍はノルマンディのドイツ軍を制圧後東方に進んでいたが，その際，自由フランス第二機甲師団（ド・ゴールの持っていた唯一の機甲部隊）を指揮したルクレール将軍はパリは迂回するようにという総司令アイゼンハワーの命令を無視してパリへの一番乗りを果たした[54]。こうした行動も同じように政治的な理由によるものだったはずだ。

サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島の制圧を知ったアメリカのメディアはこの戦争における民主主義国の最初の勝利だとしてこぞって自由フランスを讃えた[55]。しかしこれは同時に，アメリカ，イギリス，ヴィシー政府に対するド・ゴールの政治的勝利の第一歩でもあったのだ[56]。

9　「総督」の意図

セリーヌやラヴァルらがシグマリンゲンに滞在していた1944年には，もちろんサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島に対するヴィシー政府の影響力はなくなっていた。そうしたことを十分承知の上で，セリーヌはラヴァルに「総督に任命して欲しい」という願いを申し出るのだ。実生活でこうしたジョークを繰り返していたということには軽い戯れ以上の意味はないかもしれない。しかしこのエピソードが『城から城』に収められているということは，セリーヌの伝記作者達が言うように，またセリーヌ自身が読者にそう思わせたがっているように，彼自身の同諸島への思い出があったためだけだとは考えにくい。連合国各国の複雑な思惑が絡み合う中，自由フランスの活動における最初の勝利となった事件の舞台，ド・ゴールが世界に認知されるために行った重要な冒険の舞台，そのサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島をセリーヌが治めるという仮想をどうとらえるべきか。よりによって対独協力知識人の代表格ともされ，国外へ逃亡したヴィシー閣僚と行動を共にしていたセリーヌが総督になるという仮想をどうとらえるべきか。これはやはり作者による意図的かつ非常に辛辣な皮肉であり，政治的な意味合いをもったあてつけと考えるべきではないだろうか。

このような点に一度気付くと，『城から城』がこうした政治的なジョーク，しかも自由フランスの立場から見れば（すなわち戦後のほとんどのフランス国民と，そして連合国諸国の人々の立

場から見れば）攻撃的とさえ受け取れるジョークに事欠かないことがわかる。例えば次のような場面だ。

> 彼（ドイツ軍医トラオプ）は私を逮捕しに来たんだろうか？……私は考えてみた！……ドアの前に憲兵を待機させて？……メネトレルを捕まえたときも彼らは同じようなやり方をした……医者とその護衛と……メネトレルも医者だった……このトラオプは冷たい感じのドイツ人だ……もちろんフランス人は大嫌いだ！……他のドイツ野郎と同じように……[……]私の頼んだものはいつも，全部拒否した，いつもだ……クラインディーンストと同じように……硫黄軟膏，水銀軟膏，モルヒネも……一度だって！……「残念ですが！残念ですが！」……[……]我々に便宜を図ったなんてことで，「解放軍」が来たときに咎められたくなかったんだ……
>
> それにしても一張羅を着てのこの訪問は何のためだ？……折り目の着いたズボンに短刀を下げて！……それに鉤十字も？こんなに護衛をつけて？踊り場一杯に……分からなかった……彼はやっと話した……話し始める……
>
> 「先生，お願いがあってきたんです……」あまりなまりのないフランス語を話す……はっきり，簡潔に……彼のところに病人，というか負傷者がいる，手術をしたドイツ人だ……先生に見てもらえたら本当に助かるのですが，と言って[……]トラオプも自分でジュネーヴへ，赤十字へ問い合わせることができるが……あなたが直接ジュネーヴへ手紙を書いた方がいいんじゃないか，その負傷者のために，と言って……そういうことにして！……そういうとにして！……赤十字はド・ゴール派だから……囚われのフランス人たちもド・ゴール派だから！……あなたもド・ゴール派だから！……どうでしょう？
>
> 「なるほど！なるほど！」
>
> なるほど！そして笑う！……なんておかしな話だろう！……書いてもらえるだろうか？……もちろんいたしますよ！……[57]

これはドイツ軍医トラオプの訪問を受ける場面だ。最初は改まった服装や憲兵を見て彼に強い警戒心を抱いていたセリーヌだが，トラオプの「囚われのフランス人たちもド・ゴール派だから！……あなたもド・ゴール派だから！」というジョークで笑い，すっかり仲良くなってしまう。この囚われのフランス人たちというのは戦線で捕らえられた捕虜の兵士ではなく，シグマリンゲン（小説中はジークマリンゲン）に滞在せざるを得なくなっている対独協力者たちのことだろう。セリーヌを含むこうした人々をド・ゴール派と言ってしまうのだから，これはかなり辛辣で明示的なジョークである。

また，小説の締めくくりにはこういう部分もある。

> また別の思い出，モン・ヴァレリアン……フォッシュ病院……これについては，私も志願していいだろう，モン・ヴァレリアンでうまくやっていけるだろう……自分が要塞司令官になったところがはっきり見える……モン＝ヴァレリアンの司令官は本当に何て静かな環境で働いていることか！

望遠鏡で見える，その屋敷が，グレコ＝ローマンの壮麗な住居……これこそ私に必要なものだ！……その峻厳な豪華さ……軍事的な！……ドーリア式円柱……朝日をいっぱいに浴びて！少なくともここより50メートルは高い……モン＝ヴァレリアンの司令官には不満なんて無いはずだ！……彼と仲良くなれるんじゃないか？「交換」できないか？……今はそこらじゅうで「交換だ！交換だ！」なんて言ってるし，でも私の肩書きに文句を付ける人もいるだろうか？……サン＝ピエール＝エ＝ミクロンは私のものじゃない，そもそもラヴァルは死んだって！……ビシュロンヌも何も証言を残してない，書いてないって！……植民地省にも何も残ってない，私の言葉だけじゃ足りないって！……しかし私みたいな貧血症の病人には，本当にたくさんの太陽が必要なんだが！たくさん！……たくさんの！……[58]

セリーヌはサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島総督の地位をモン＝ヴァレリアン要塞司令官のそれと取りかえたいと語る。セリーヌがここの司令官になりたいというのは，この要塞は静かで仕事がしやすいし，それに朝日をたっぷり浴びる場所だからだと言う。しかし静けさと太陽，殊に太陽を求めるというのなら，あえてパリ近郊の丘を選ぶのは妥当なのか。この引用部分にひきつづき，もう一つ理由が示されている。それはドレフュス事件で書簡を偽造したアンリ中佐がこのモン＝ヴァレリアンで自殺したとされているから，その真相を確かめたいというものだ。

だがセリーヌは次の点には触れていない。このパリを見下ろすモン＝ヴァレリアン要塞は，1940年から44年までドイツが占拠したいわくのある場所だ。大戦中パリ周辺では多くのレジスタンがドイツ軍に処刑されたが，各地区からレジスタンがもっとも数多く集められ，処刑が執行された場所がこのモン＝ヴァレリアンだった。占領地区で処刑されたレジスタンは4500人あまりと推定されているが，そのうちモン＝ヴァレリアンでは981人が殺されたと考えられている[59]。そのため1944年8月にパリを解放したド・ゴールは早くもその11月にここで犠牲者を追悼する有名な演説を行っているし[60]，1960年にはレジスタンス記念館を作る場所として選ばれている。このことを考えると，セリーヌが先にあげている理由は二次的なものではないかという強い印象をうける。ここはサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島同様，ド・ゴール派にとっては非常に大切な場所なのだ。だからセリーヌがその司令官となるというのはレジスタンスにとっては極めて大きな侮辱となるだろう。

こうした連合軍諸国，ド・ゴール派その他のレジスタンスに対する強い当てつけがどうして行われているかを知るには，『城から城』がどんな思いを込めて書かれた小説なのかを確認しなければならない。この小説は前半と後半に別れており，前半はセリーヌの独白，後半がシグマリンゲン（小説中ではジークマリンゲン）で過ごした日々の回想となっている。一見してわかることだが，前半で繰り返し語られるのは作者自身の恨みの感情である。笑いのオブラートに包まれてはいるが，彼が恨みを込めて攻撃するのはかつて住んでいたジラルドン通りのアパートを略奪した「復讐に燃える解放者たち」であり[61]，パリが連合軍に爆撃されたことを認めようとしないレジスタンス勢力や一般のメディアであり[62]，逃亡の末デンマークで監獄送りになり，その後も厳しい生活を送らなければならなかった自らの運命であり[63]，自分を売国奴呼ばわりしたサルトル

であり[64]，『夜の果ての旅』以来の知人である出版者ドノエルのように右翼的傾向の強い者が人知れず殺されていく世相であり[65]……このように枚挙にいとまがない。この戦争では自分たちのように「間違った列に並んでしまった[66]」者，すなわち対独協力者と，勝者，すなわちド・ゴールについた者がいる。セリーヌの恨みは深く，広い対象に向けられていると言って良い。

ただ，セリーヌは『城から城』以前にもそうした私的な恨みの感情を小説に表していた。それが監獄での暮らしを克明に描いた『またの日の夢物語１』と，全編パリの爆撃シーンばかりの『またの日の夢物語２（ノルマンス）』だ。だがそのどちらも商業的には全くの失敗に終わった。『城から城』ではあまり直接的にそうした感情が表されることがなかったが，「読者には笑いが必要だ[67]」と自ら言っているように，主張したいことがあっても読者の気にかからないような形で表現することにしたのだと考えられる。

『城から城』は発表直後から，「ここには本物のセリーヌがいる」というような非常に高い評価を受けた[68]。『なしくずしの死』以来20年にわたって文壇から忘れられていたと言って良いセリーヌは，この作品で復権を果たした。このように大きな成功を収めたのはもちろん作品の完成度が高かったからであるが，もしセリーヌが『またの日の夢物語』のように私怨を前面に押し出していたら，批評家たちの態度は変わっていたのではないだろうか[69]。サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島やモン＝ヴァレリアン要塞に関する記述のような，わかる者にはわかる皮肉なほのめかしがここでは重要な表現手段となっているのだ。

『城から城』以後もセリーヌは相変わらず同じ恨みや憎しみを語り続ける。『北』でもフランス脱出に関する回想は繰り返されるし[70]，『リゴドン』ではフィガロ紙の訃報欄を見るのが数少ない楽しみの一つだと語る[71]。戦後になってもセリーヌは自らの政治的態度を反省することはないが，それでも彼のドイツ三部作が好評を得ていたのは，フランス人の多くが，対独協力者とは「間違った列に並んでしまった」者だと理解していたからかもしれないし，行き過ぎた粛清に対する反省があったからかもしれない。

notes

1） 村松剛，『アンドレ・マルロオ』とその時代，p. 122

2） " ah, et aussi Siegmaringen!... là y avait urgence un peu! ... tous, l'Article 75 au derge!... [...] toute la Planète à la haine! ... qu'ils étaient monstres et pire que ça! ... que pas un supplice suffirait... mille et mille! et plus! plus! ... des siècles! ... même mes malades du <Fidelis> qu'étaient presque déjà des morts, dégoulinants de pus, tout labourés de gale, crachant pancréas et boyaux, me demandaient aussi la façon de finir comme un rêve... Salut! ... je vous dis les ministres au Château qu'étaient encore les plus nerveux! ... le moyen? si je la connais la façon?... revolver? cyanure?... pendaison? ... " *Romans, II*, p.29-30

3） "Je leur (à Laval et à Bichelonne) pose mon cyanure sur la table... le bureau de Laval... mon flacon [...] oh, ils sont pas longs tous les deux! ... déjà à qui qui l'aura! ...[...]

"Vous me le donnez? vous me le donnez?" ils me demandent tous les deux... oh, ils rigolent plus!

"Partagez-vous-le! "

Qu'ils s'arrangent! ... je repense...

"Non! ... vous disputez pas! ... je vous en donnerai chacun un! une fois ouvert! vous le savez? humidifié! fini!

— Mais quand? ... mais quand? ... "

Ah, ils me prennent un peu au sérieux! tout de même! je sors un autre flacon d'une autre poche! ... encore un autre de ma doublure! [...]

je vois, ils me considèrent... ils parlent plus... mais ils sont contents..." *Roman, II*, p.245

4) " — Oui! ... c'est entendu! mais vous-même? ... tout de même, vous avez bien un petit désir? "

Voilà une autre idée qui me monte! pourtant je peux dire j'ai tout refusé! tout! mais où on est... plus rien a plus d'importance! ...

" Vous pourriez peut-être, Monsieur le Président, me faire nommer Gouverneur des Iles Saint-Pierre et Miquelon?"

J'ai pas à me gêner!

" Promis! ... accordé! entendu! vous noterez n'est-ce pas, Bichelonne?

— Certainement, Monsieur le Président!

Laval tout de même... Laval a une petite question...

" Mais qui vous a donné l'idée, Docteur?

— Comme ça, Monsieur le Président! les beautés de Saint-Pierre et Miquelon! ... " *Romans, II*, p.246

5) "Je lui raconte... je parle pas par " on dit "... j'y ai été! ... on mettait alors vingt-cinq jours Bordeaux-Saint-Pierre... sur le très fragile *Celtique*... " *Romans, II*, p.246

6) F. Gibault, *Céline, II*, p.186 ; F. Vitoux, *La vie de Céline* ,p.323

7) " C'est peut-être pour chercher un éventuel refuge et en tout cas pour changer d'air que Céline, en route pour les États-Unis, décida de passer par Saint-Pierre-et-Miquelon " Gibault, *ibid.*, p.186 ただし，第3巻で再びこの島について触れている箇所があり，そこでは「(セリーヌは) この島がド・ゴールの味方についた最初の地域の一部だということを忘れて」いるという表現を加えている。Gibault, *Céline, III*, p.63

8) " Du tourisme? des tournées de conférences ou de promotions de ses livres? Mais non, il poursuivait son idée fixe, il continuait simplement d'explorer ses futurs et éventuels territoires d'exil, après Londres et Jersey! "Vitoux, *ibid.*, p.323

9) " Cette année flotte sur l'Europe comme une odeur méphitique d'Apocalypse... " H. Mahé, *La Brinquebale avec Céline* より転載。Vitoux, *ibid.*, p.323

10) " Un seul pays au monde résistera encore un siècle, celui où les curés sont rois, le Canada, le plus emmerdant de tous les pays... mais j'irai, je servirai la messe. " *Cahiers de l'Herne* より転載。Vitoux, *ibid.*, p.323

11) " [...] Céline cherchait une île suffisamment déshéritée pour ne faire envie à personne et n'être l'enjeu d'aucune bataille dans la guerre à venir [...]" Gibault, *Céline, II*, p.186. Vitoux, *ibid.*, p. 323 も参照。

12) " Vous verrez ça, Monsieur le Président! en plein océan Atlantique! " *Romans, II*, p. 246

13) *Grand Larousse Universel* および N. Cazeils et A. de Palmaert, *Itinéraires de découvertes, Saint-Pierre-et-Miquelon* より。

14) " En rigolant ensemble je lui demandais toujours s'il revenait au pouvoir (??!!!) de me faire nommer gouverneur de St Pierre et Miquelon — ma seule ambition terrestre. Il me promettait toujours d'étudier la chose! ... Je suis un fervent de St Pierre et Miquelon — c'est l'île la plus pauvre et la plus désolée du monde — c'est tout ce qu'il nous reste du Canada, de notre grandeur — c'est l'Ile-Reproche — " *Lettres à son avocat*, p.42-43

15) ラヴァルは1942年4月にヴィシー政府の首相に任命される。シグマリンゲンに滞在していたころも，ラヴァルは公的にはまだ首相の職にあった。

16) *Grand Larousse Universel* および N. Cazeils et A. de Palmaert, *ibid.*

17) 例えば歴史家 Robert Aron は次のような認識を持っていた。ナチスがヴィシー政府に対して協力要求を繰り返したのに対し，ヴィシー政府はフランスが搾取されるのを拒む「盾」の役割をしていた。ヴィシー政府は連合軍と密かに通じており，対独協力は敵を欺くための行為だった。フランス人全体は，ドイツに対する反攻の機会が訪れるのを待っていた。*L'Histoire de Vichy* 参照。また，ド・ゴールとペタンがドイツに対する「槍と盾」として協力関係を持っていたとする見方は一般的なものだった。H. Amouroux, *La Grande histoire des Français sous l'Occupation*, p.752など。

18) R. Paxton, *La France de Vichy*, p.101

19) " Vichy n'a d'ailleurs pas que des objectifs défensifs. Laval et Darlan essaient, comme nous le verrons plus loin, d'intéresser le Reich à un même projet : la France serait pour l'Europe nouvelle le lien colonial et maritime avec l'hinterland africain " Paxton, *ibid.*, p.103

20) " [...] l'armée française du Moyen-Orient s'empare des champs pétroliers irakiens et sur la côte méditerranéenne, " pour le compte de la France, de l'Allemagne et de l'Italie tout à la fois, et avec l'accord de ces deux dernières " " Paxton, *ibid.*, p.103

21) Amouroux, *ibid.*, p.780

22) Amouroux, *ibid.*, p.782

23) Paxton, *ibid.*, p.116

24) Paxton, *ibid.*, p.102

25) J.ピムロット，『第二次世界大戦』，p.29およびR.オウヴァリー，『ヒトラーと第三帝国』，p.132。

26) Amouroux, *ibid.*, p.526

27) 1940年6月ほぼ同率の人員から成っていたイギリス・フランス連合軍は，ダンケルクの戦いで敗退，撤収する際，イギリス人10人に対してフランス人1人の割合でしか撤退用艦船に収容されなかった。Amouroux, *ibid.*, p.312。同年7月，アルジェリアの軍港メルゼルケビールで，イギリスへの合流を拒んだフランス艦隊がイギリス海軍に攻撃され，1200人以上の死者を出した。Paxton, *ibid.*, p.87。なおこのときフランス兵の死者の数はAmyotによれば1297人，剣持によれば1380人。É. Amyot, *Le Québec entre Pétain et De Gaulle*, p.22および持久木「占領下フランスにおける対独経済協力 ― 航空機生産共同計画をめぐって ―」p.57。その他，40年9月にはダカールで，翌年春にもシリアで両軍は交戦している。Paxton, *ibid.*, p.101。

28) 1940年5月31日，イギリスのスピア将軍はペタンに，もしフランスがイギリスとその敵の間に立ちはだかるなら，「残念ではあるが断固としてフランスを叩き，敵により多くの被害を与えるだろう。[.....] フランス人は世代を経るごとに，我々がどんなに容赦のない敵であり得るかを忘れてしまっている。」と伝えている。Amouroux, *ibid.*, p.315

29) 剣持久木，前掲書。

30) " Et d'ailleurs notre flotte n'eût pu se faire sauter plutôt que de se rendre, pour la raison qu'elle s'était déjà rendue avec Pétain, qu'elle n'était plus, avec Pétain, depuis l'armistice, qu'un instrument de chantage, de marchandage, au service d'une politique d'expédients. " G. Bernanos, "Le scénario de Toulon", *Essais et Écrits de combat, II*, p.477

31) サン＝ピエール島にフランス海軍護衛艦ヴィル＝ディースが停泊しており，これが自由フランスによるサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島占拠計画の障害となっていた。Muselier, *De Gaulle contre le Gaullisme*, p.247

32) R. Aglion, *De Gaulle et Roosevelt*, p.48

33) Paxton, *ibid.*, p.87

34) Amouroux, *ibid.*, p.767

35) Paxton, *ibid.*, p.85-86

36) 1940年6月。

37) ただし，BBC放送がド・ゴールに協力して大規模な宣伝を行ったり，イギリスが早くから自由フランスを認めたりしたのは，フランスとドイツが闘い続けて互いに消耗すればイギリスにとって二重に都合がよかったからだと見る者もいた。Amyot, *ibid.*, p.106

38) アメリカは国を蹂躙されたフランス人全体に対しては同情していたが，自国が戦争に巻き込まれることは望んでいなかった。1935年には既に，ヨーロッパの戦争に関わる危険を避けるため，戦争を行っている外国に軍需品を売るのを法律で禁止している（後に段階的に解除している）。F.R.ダレス，『アメリカ対外関係史』，p.272。またド・ゴールについては，当初「極右の独裁主義者」と見る者もいれば，「極左革命家の取り巻きを持った共産主義者」と見る者もいた。少なくとも認知度は低かったということだろう。Aglion, *ibid.*, p.17

39) Paxton, *ibid.*, p.135

40) 後にサン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島が自由フランスに占拠されたときのハルの発言は次のように伝えられている。"L'action entreprise à Saint-Pierre-et-Miquelon par les navires soi-disant français libres l'a été sans que le gouvernement des États-Unis en ait eu au préalable connaissance et sans qu'il y ait aucunement donné son consentement." De Gaulle, *Mémoires*, p.186-187 に翻訳転載。

41) サン＝ピエール＝エ＝ミクロン諸島占領後，米メディアは政府高官が自由フランスを呼ぶときに付けていた"so-called"という言葉を批判するようになる。Aglion, *ibid.*, p.57

42) 駐ヴィシーのアメリカ大使は1942年4月29日ワシントンに次のような電報を送っている。"C'est un général respecté du grand public, suivi par l'armée, et dont la réputation impeccable... Si l'occasion s'en présente, Giraud sera l'homme désigné pour conduire l'armée française contre l'envahisseur : c'est un chef prestigieux." N.E.Gun, *Pétain-Laval-De Gaulle*, p.318

43) Amouroux, *ibid.*, p.914

44) Aglion, *ibid.*, p.49-50

45) "Les accords d'Ogdensburg sur la défense de l'Amérique du Nord, conclus en août 1940 entre les États-Unis et le Canada, symbolisent le transfert des intérêts canadiens de l'Empire à l'Amérique." Amyot, *ibid.*, p.31

46) 占拠の11日前ルーズヴェルトはペタンにアメリカ大陸における植民地の領有状態に変化は起こらないと約束して，「両国（アメリカ合衆国とフランス）の緊密な関係と友情は変わらないだろう」と伝えている。Aglion, *ibid.*, p.49

47) ミュズリエは12月18日にド・ゴールから電報を受け，作戦の実行が決まる。Muselier, *ibid.*, p.48以下。

48) ヒトラーはこれを受け入れなかった。Paxton, *ibid.*, p.176

49) Muselier, *ibid.*, p.256

50) Aglion, *ibid.*, p.50

51) "Nous protestâmes aussitôt à Londre et à Washington. Mais, dès lors qu'il était question d'une intervention étrangère dans un territoire français, aucune hésitation ne me parut plus permise." De Gaulle, *ibid.*, p.186

52) De Gaulle, *ibid.*, p.186。また，ミュズリエによると，漁民などを主体とする島民は70パーセントが自由フランスに好意的であり，20パーセントは迷っており，残りわずかに公務員などがヴィシー寄りだった。Muselier, *ibid.*, p.278-279

53) D. Lapierre et L. Collins, *Paris brûle-t-il?* , p.73

54) ピムロット，前掲書，p.152

55) 連合軍はパールハーバーやリビアで続けて被害を被っていたので，これはヴィシーと枢軸国に対する最初の勝利だとして祝った。Aglion, *ibid.*, p.54-57

56) ただし，その後の自由フランスとアメリカ合衆国との関係が悪化したのは確かだ。連合軍による北アフリカ上陸作戦の際もド・ゴールに連絡は無かったし，フランスが戦後国連憲章に調印するのも遅れた。Aglion, *ibid.*, p.62

57) " il vient m'arrêter? ... ce que je me demande, moi! ... ce déploiement de gendarmes devant notre porte? ... quand ils ont coffré Ménétrel ils ont opéré pareil... par un médecin et une escorte... il était médecin aussi, Ménétrel... celui-ci, Traub, est un Allemand du type froid... il déteste les Français, bien sûr! ... comme tous les boches... [...] moi toujours, il m'avait refusé tout, toujours... comme Kleindienst... pâte soufrée, pommade au mercure, morphine... jamais! ... *Leider! Leider!* ... [...] il voulait pas lui non plus que les " libérateurs " lui reprochent d'avoir eu la moindre complaisance...

Mais là, pourquoi cette visite sur son 31? ... pantalon à pli et la dague! ... et la croix gammée! ... et toute cette escorte? plein le palier... je voyais pas... enfin, il parle... il s'y met...

" Collègue, je venais vous demander quelque chose..." Il parle français sans trop d'accent... il est net, bref... il m'expose qu'il a un malade, un blessé plutôt, un opéré, un soldat allemand... qu'il serait heureux que je vienne le voir... [...] Traub pourrait s'adresser à Genève, à la Croix-Rouge... mais que ce serait beaucoup mieux si j'écrivais directement moi-même à Genève et pour un prisonnier blessé... soi-disant! ... soi-disant! ... que la Croix-Rouge était gaulliste... les prisonniers français aussi gaullistes! ... moi aussi, gaulliste! ... alors?

"Certainement! Certainement! "

Certainement! et de rire! ... comme c'était drôle! ... si je voulais bien? je voulais bien tout! ... " *Romans, II*, p.258-259

58) " d'autres souvenirs, le Mont-Valérien ... l'hôpital Foch... au fait, je peux un peu postuler, je me ferais très bien au Mont-Valérien... je me vois parfaitement Gouverneur... de quel calme il jouit pour travailler le Gouverneur du Mont-Valérien! j'aperçois très bien son hôtel, avec ma longue-vue, cette vraiment splendide résidence, gréco-romantique... juste ce qu'il me faudrait! ...cette somptuosité sévère... militaire! ... à colonnes doriques... il a le soleil levant en plein! ... et il nous domine, d'au moins cinquente mètres! ... oh, il n'est certe pas à plaindre le Gouverneur du Mont-Valérien! ... nous pourrions peut-être nous entendre? faire "l'échange"? ... j'entends parler partout " j'échange! ... j'échange! " peut-être on contestera mes titres? ... que j'ai pas Saint-Pierre et Miquelon! ... d'abord, que Laval est mort! ... et que Bichelonne a rien laissé, rien écrit! ... qu'on ne trouve rien aux " Colonnies! " et que ma parole suffit pas! ... pourtant comme je suis, malade anémique, j'aurais vraiment besoin de soleil! beaucoup! ... beaucoup! ... " *Romans, II*, p.293

59) H. Michel, *Paris résistant*, p.228-230

60) 次の一節は有名だ。"Oui! tandis que la torture s'acharnait à réduire leur âme à travers la douleur de leur corps, ils confessaient la France, ils ne confessaient que la France. Et, à l'instant même où la rafale des fusils de l'ennemi se déchaînait pour les abattre, ils criaient " Vive la France! " Il ne criaient que cela." De Gaulle, *Discours et messages*, tome I, p.470

61) " on m'a tout volé à Montmartre! ... tout! ... rue Girardon! ... je le répète... je le répèterai jamais assez! ... on fait semblant de pas m'entendre... juste les choses qu'il faut entendre! ... je mets pourtant les points sur les i... tout! ... des gens, libérateurs vengeurs, sont entrés chez moi, par effraction, et ils ont tout emmené aux Puces! ... tout fourgué! ... j'exagère pas, j'ai les preuves, les témoins, les noms... tous mes livres et mes instruments, mes meubles et mes manuscrits! ··· tout le bazar! ... j'ai rien retrouvé ! ... pas un

mouchoir, pas une chaise! ... vendu même les murs! ... "*Romans, II,* p.4

62) " [...] personne m'avancera plus un flèche pour une histoire genre *Normance!* je le dis! ... le lecteur veut rire et c'est tout! ... jamais Paris ne fut bombardé! ... d'abord! ... et d'un! ... aucune plaque commémorative! ... la preuve! ... moi, seul, qui me souviens encore de deux, trois familles ensevelies! ... " *Romans, II,* p.45. 『ノルマンス』は連合軍によるパリ空襲を描いた作品で，全く評価されなかった。パリの爆撃が無かったことになっているとセリーヌは他の作品の中でも語り度々憤慨するが，これは連合軍による爆撃の事実があまりに人口に膾炙するのは，自分たちの手によるパリ解放を強調しようとするレジスタンスにとって都合の悪いことだったから広められずにいるというのだ。ただ実際には1942年以降フランス各地への爆撃は続いており，それに対する知識人の反対声明も出されていた。Paxton, *ibid.*, p. 292, p.361など。

63) " nous sommes certes très habitués! ... entraînés! je veux! ... l'entraînement nordique! nous avons tenu là-haut pendant quatre hivers... presque cinq... par 25 au-dessous... dans une sorte de décombre d'étable... sans feu, sans feu absolument, où les cochons moureraient de froid... je dis! ... or donc, entraînés nous sommes! ... tout le chaume s'envolait... la neige, le vent dansaient là-dedans! ... cinq ans, cinq mois à la glace! ... " *Romans, II,* p.5

64) " eux là, eux autres, Racine, Loukoum, Tartre, Schweitzer, faisaient la quête de ci... de là... ramassaient les ronds et Nobel! ... " *Romans, II,* p.11. Tartre がサルトルを指す。セリーヌはサルトルに対して " À l'agité du bocal " という批判記事を書いている。

65) " Puisque nous sommes dans les Belles Lettres je vous parlerai de Denoël… de Denoël assassiné… oh, qu'il avait d'odieux penchants! … s'il le fallait il vous fourguait, bien sûr, bel et bien! […] cependant un côté le sauvait… il était passionné des Lettres… il reconnaissait vraiment le travail, il respectait les auteurs… tout à fait autre chose que Brottin! … " *Roman, II,* p.11. ドノエルは1944年12月に殺されている。セリーヌやアラゴン，ウジェーヌ・ダビなどの作家のみならずヒトラーやムソリーニの本も出版していた。Ory, ibid., p.219. なお Brottin はガストン・ガリマールのこと。また戦争末期になると，解放に乗じて処刑された対独協力者は8000から9000人に上る。戦後の裁判では1600人あまりが死刑宣告を受けた。Paxton, *ibid.*, p.383

66) " Je me suis trompé de file en 1940 ; rien de plus. " " Interview avec André Parinaud, II " in *Céline et l'actualité littéraire 1957-1961*, p.37

67) *Romans, II,* p.49

68) 出版当時の反応については *Romans, II,* p.1020 以降参照。

69) 50年代前半に強かった対独協力者に対する風当たりも，フランス社会に経済的な安定が得られ始めた50年代半ば頃からは弱まりだした。Rousso, *ibid.*, p.77.『またの日の夢物語1，2』（1952，1954年）の不評と『城から城』（1957年）の好評の違いは，こうした世相の違いも表しているかもしれない。またオリは，「セリーヌは（戦後の対独協力者）復権の曖昧さの全てを象徴している」としている。Ory, *ibid.*, p.9

70) *Romans, II,* p.358等。

71) *Romans, II,* p.717-718

Bibliographie

セリーヌの作品

D'un château l'autre (1957), *Romans, tome II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974

Nord (1960), *Romans, tome II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974
Rigodon (1969), *Romans, tome II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974
Lettres à son avocat, La Flûte de Pan, 1984

参考文献

R. Aglion, *De Gaulle et Roosevelt*, Plon, 1984
H. Amouroux, *La Grande histoire des Français sous l'Occupation*, Robert Laffont, 1976
é. Amyot, *Le Québec entre Pétain et De Gaulle*, Fides, 1999
G. Bernanos, "Le Scénario de Toulon", *Essais et Écrits de combat, tome II,* Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1995
N. Cazeils et A. de Palmaert, *Itinéraires de découvertes, Saint-Pierre-et-Miquelon*, Ouest-France, 2001
J.-P. Dauphin et H. Godard, *Céline et l'actualité littéraire 1957-1961*, Gallimard, 1976
C. De Gaulle, *Mémoires*(1954), Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2000
C. De Gaulle, *Discours et messages*, tome I, Plon, 1970
F. Gibault, *Céline, II, et III*, Mercure de France, 1985
N. E. Gun, *Pétain-Laval-De Gaulle*, Albin Michel, 1979
D. Lapierre et L. Collins, *Paris brûle-t-il?* (1944), Livre de Poche, R. Laffont, 1982
H. Michel, *Paris résistant*, A. Michel, 1982
Muselier, *De Gaulle contre le Gaullisme*, Chêne, 1946
P. Ory, *Les Collaborateurs*, Seuil, 1976
R. Paxton, *La France de Vichy*, traduction de *Vichy France,* Seuil, 1973
F. Vitoux , *La Vie de Céline,* Bernard Grasset, 1988
R.オウヴァリー，『ヒトラーと第三帝国』，秀岡尚子訳，河出書房，2000
剣持久木，「占領下フランスにおける対独経済協力 ― 航空機生産共同計画をめぐって ―」，『西洋史学』，166号，1992
F.R.ダレス，『アメリカ対外関係史』，田村幸策他訳，日本外政学会，1958
B. ピット，『大西洋の戦い』，高藤淳訳，タイムライフブックス，1976
J.ピムロット，『第二次世界大戦』，田川憲二郎訳，河出書房，2000
村松剛，『アンドレ・マルロオとその時代』角川書店，1985